

148 ドーム兄弟のジャポニスム（2023年2月16日）

前は、日本の影響を受けたエミール・ガレの作品を紹介しました（*）。ガレと同じくナンシー派で活躍したドーム兄弟も、日本からインスピレーションを受けた作品を残しました。ナンシーにあるナンシー美術館に展示されている300点余りのドーム・コレクションのうち、日本の影響がわかる作品をご紹介します。

兄オーギュスト・ドーム（1853-1909）が、1878年から父親のガラス工房を手伝うようになり、後に弟のアントナン・ドーム（1864-1930）が加わりました。ドーム兄弟として知られた二人は、いくつもの新しいガラス製造の技術を開発し、それまでになかったデザインのガラス製品を開発して、各地で開催された万博で賞を獲得しました。

ドーム兄弟の工房で働いていた職人たちは、日本の漆器や陶器に描かれていた菊の花、梅の枝、桜の花をしばしばデザインに取り入れました。燕や鷺などの鳥が飛ぶ姿、トンボやコガネムシといった昆虫、魚や海藻の水中の生き物も描かれました。非対称な構図や対角線状に走らせた模様は、浮世絵を参考にしたと言われています。

具体的に作品を見ていくと、まず菊の花が描かれた花瓶（写真右）があります。これは、色の異なるガラスの層を作って模様を削り出しています。花瓶の丸い形と大輪の菊の花を大胆なデザインは、インパクトがあります。



次は、花瓶「沼地と鷺」です（写真左）。夕焼けが輝く沼地の上を鳥が飛んでいる様子は、かつての日本の農村の風景を思い起こさせるデザインです。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本



「とんぼとラナンキュラス」というタイトルの花瓶（写真左）には、ヴィトリフィカシオンという技術が使われています。これは、溶解したガラス素地に粉末状の色ガラスをまぶし、炉に戻して再加熱することで表面にマーブル状の薄い層を作り出す技法です。

最後に、「海藻と魚」を描いた二つの作品をご覧ください。一つは花入れ（写真右上）で、もう一つは花瓶（写真右下、部分）です。花瓶には、アンテルカレールという技法が使われています。ガラス素地に絵模様を描いて、さらにガラスをかぶせる技術です。写真では見えにくいですが、赤色で描かれた魚と海藻が、下の模様重なって描かれているのがお分かりになるでしょうか。ドーム兄弟は、この技法で 1899 年に特許を取得し、ドーム兄弟を代表する技法となりました。



ドーム兄弟が生み出したガラス製品の新しさには、彼らが開発した新たな技術だけではなく、日本由来のデザインも一役買っていたことが分かります。

ナンシー美術館（ドーム・コレクション）

<https://musee-des-beaux-arts.nancy.fr/en/translate-to-english-les-collections/translate-to-english-collection-daum>（英語）

* [147 エミール・ガレのジャポニスム](#)